

アカデミア メランコリア (第31回) (若手のコラム)

北海道大学 大学院水産科学院
海洋研究開発機構 北極環境変動総合研究センター

村松 美幌

前回、担当してくださった東京大学の藤原 泰さんからご依頼を受け、今回のコラムを担当させていただきます北海道大学大学院水産科学院の村松 美幌と申します。まずは、このような執筆の機会を頂けたこと大変嬉しく思います。有難うございます。私は北海道大学水産科学研究院の上野 洋路准教授の研究室で北極海チャクチ海における太平洋夏季水の熱輸送について研究をしています。学部・修士時代には係留系観測やCTD観測のデータを利用し、太平洋夏季水の輸送経路や輸送過程における水温塩分変化を主題として研究を行ってきました。2020年4月からは博士進学と同時に海洋研究開発機構の北極環境変動総合研究センターに拠点を移し、渡邊 英嗣研究員をはじめ同センターの研究員の皆様に支えられながら研究生として活動しています。今後の進路に悩んでいた事もあり、自分の研究への思いを整理する良い機会になるのではないかと今回のコラムの執筆を引き受けさせて頂きました。せっかく、このように自分の思いを発信する機会を頂いたので、私が海洋学に関わるきっかけにもなった‘フィールドワーク’について書きたいと思います。



私は小学生の頃から教室で友達とおしゃべりするより屋外でドッチボールをするような子供でした。そんな私の大学選びのポイントの一つが‘フィールドワーク’が出来る事でした。当初の第一志望は地球惑星科学科に行く事だったのですが、残念ながら第一志望には受からず、「対象が陸から海になっただけだ！外に出て調査ができることに変わりはない！」と第二志望の水産学部へ進学。まさか、この進学がきっかけで、長く海洋学に関わる事になるとは、当時の私には想像もつきませんでした。しかし、その時のフィールドワークへの熱は研究室選びの段階でも変わる事はなく、「北極に行ける！」「船に乗れる！」という思いから現在の研究室に所属しました。

実際、北大水産学部が所有する「おしよる丸」による45日間の調査航海に参加し、紙面上で学んだ水温や塩分の変化を肌で実感した事は、私の中で大きな経験でした。船内の蛇口から出る表層海水に触れば、北に行くにつれて海面水温が低下していく事が手に取るように分かりますし、北極圏に入れば氷点下の海水が当たり前のように存在します。百聞は一見にしかずと言いますが、実際に現場に行って調査することで初めて、研究対象海域の様子や海洋現象のスケール感が得られるという事を実感しました。またこの経験を通して、船舶観測によるデータの取得に多大な労力と時間が使われている事や、観測自体、天候の影響を大きく受ける事を知り、その場所・その時にしか得る事が出来ない現場データの貴重性を痛感して、現場データを扱う身として気が引き締まった事を覚えています。

対面で行われていた学会の多くがオンラインで開催されるなど、昨今の状況下でインターネット上での研究活動が広がっています。オンラインでの研究活動の利便性は非常に大きいですし、研究の効率化やグローバル化に欠かす事が出来ませんが、こういう時代にこそ実際のフィールドに出て画面上の数字を自然現象として肌で実感する事が、その貴重性と説得力の強さから、より一層、重要になるのではないかと思います。

昨年、有難い事に海洋地球研究船「みらい」に乗船し観測のお手伝いをする機会を頂きました。初めて海水のある海域へ行き、360度一面、真っ白な世界を目の当たりにした時は、北極研究に携わる身である事を実感するとともに、北極という場所に触れ、研究活動を行えている事の貴重さを改めて実感しました。博士課程2年という間の期間で将来への不安も大きい時期ではありますが、今後の自分の人生を考えたつても、目の前にある課題に真剣に向かい、一步一步前に進んで行きたいと思っています。